

Title	岡千仞と清仏戦争
Author(s)	福井, 智子
Citation	大阪大学言語文化学. 16 P.15-P.26
Issue Date	2007-03-31
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/77866">http://hdl.handle.net/11094/77866</a>
DOI	
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 岡千仞と清仏戦争\*

福井 智子\*\*

キーワード：岡千仞、観光紀游、清仏戦争

1871年日中两国签订了《日清修好通商条约》，从此翻开了日本人研究、了解中国社会与文化的新的一页。因为江户时代以前的日本人只能通过书本了解中国，而明治维新的成功为日本人提供了去中国亲眼观察“同时代”中国的机会。因此，很多日本人开始到中国游历，与中国人进行交流。其中许多汉学造诣很高的日本汉学家留下了内容丰富的汉文日记体的游记。本稿介绍的《观光纪游》则是此类游记中初期的著名之作。

日本汉学家冈千仞(1833-1914)，字天爵，号鹿门，出生于幕末仙台藩的下级武士之家，年轻时曾在江户的昌平坂学问所学习汉学，并精于洋学。明治维新后，曾就职于修史馆、东京图书馆。因在旧萨摩、长洲藩等势力强大的新政府难于得志，四十八岁时辞职。之后，主要开办家塾培养后人、著述及作诗。明治十七(1884)年五月末，冈千仞搭乘三菱汽船“东京丸”由横滨抵达上海，对中国进行了为期大约一年的游历。他以上海为据点，游历了苏州、杭州、天津、北京、广东、香港等地。途中不仅游览了中国各地的风光，体察了庶民的生活，还拜访了王韬、俞樾、李慈铭、汪士铎等著名学者及盛宣怀、李鸿章等清朝的官吏，并向他们指出了“烟毒”“六经毒”等中国社会存在的弊端。明治二十五(1892)年出版的《观光纪游》就是期间访问中国的记录。

晚年的冈千仞在回顾游历中国时写了如下一首诗：“壮绝禹域游，逢此斗清法，如何二竖子，使我半志业”，第二句所指正是游历途中遭遇的中法战争。由于这场战争的原因，冈千仞在中国的游历不仅在行程上，而且在考察的内容上受到了许多影响。《观光纪游》无论在史学上的资料价值、还是作者考察力的深刻性方面均超过了其他游记，究其原因可以说正是由于经历了中法战争。

本稿以《观光纪游》中有关中法战争的记述为主要资料，考察、探讨冈千仞是如何审视置身于中法战争中的中国人以及借此机来到中国的日本人，并进一步考察分析中法战争是如何影响冈千仞对中国的认识。尽管冈千仞及其《观光纪游》很著名，但对其研究尚不多见。本稿力图通过对冈千仞及《观光纪游》的考察分析，为今后的冈千仞研究提供些许帮助。

\* 岡千仞与中法战争 (福井智子 FUKUI Tomoko)

\*\* 大阪大学非常勤講師

## 1. はじめに

1871（明治4）年、日清修好通商条約の締結は、日本人の中国に対する研究、及びその理解に新たな時代を開いた。それは江戸時代までの漢学者が専ら書物を通じて見知った中国社会、及び文化について、自身の目で見る機会をもたらしたからである。これ以後、多くの日本人が中国へと足を運んで“同時代”中国を観察し、そして数々の旅行記を残すこととなった。本論文が以下に取り上げる『観光紀游』<sup>1)</sup>は、これら中国旅行記の初期の代表作である。

『観光紀游』の著者、岡千仞（1833-1914）は幕末の仙台藩士で、明治期に活躍した漢学者である。その千仞が1884（明治17）年5月末、横浜港から汽船・東京丸で上海へ向けて旅立った。上海行きの乗船券は、三菱社長の岩崎与太郎から贈られた。そして翌年4月下旬までのおよそ一年間、千仞は上海を中心に蘇州、杭州、天津、北京、広東、香港へと足を伸ばし、各地を観光すると同時に、多くの中国人官僚、文人を訪れては、日中の習俗、文学、文化、そして中国社会における弊害について議論したのであった。1892（明治25）年刊行の『観光紀游』は、この時の旅の記録である。

千仞は晩年にこの中国旅行を振り返り、次のような漢詩を詠んだ。「壯絶たり禹域の游、此に清仏の闘ふに逢ふ、如何ぞ二豎子の、我をして志業を半ばならしむ」（『雑憶詩』）過食による激しい衰弱の為、志半ばで中断された旅を惜しむ内容であるが、ここで注目したいのは第二句目である。「清仏の闘ふに逢う」とは、千仞が旅の途中で遭遇した清仏戦争を指す。この戦闘の勃発により、千仞の旅は行程のみならず、以下に見るようにその内容にまで様々な影響を受けた。アヘンと科挙の弊害を指摘し、清朝末期の現状を冷静に観察する視点を持った『観光紀游』であるが、他の旅行記を凌駕するその特徴には、清仏戦争との遭遇から生じたものも多かったと言える。

本論文は、『観光紀游』から清仏戦争に関わる記述を取り上げる。そこから岡千仞が清仏戦争に向き合った中国人たち、及びこの戦争をきっかけに中国へやって来た日本人たちをどのように観察したかを検討し、そして千仞の中国理解に清仏戦争がいかなる影響を及ぼしたのか、その一端を明らかにすることを目指す。

「岡氏は、明治維新からさほど後の人ではないので、まだ改革への英気があった。だから彼の日記には、常に好意的な苦言があるのだ」<sup>2)</sup>というのは、魯迅による岡千仞と『観光紀游』への評価である。著名であるにもかかわらず、本格的な研究に乏しい岡千仞と『観光紀游』に対し、本論文をその一助としたいと思う。

<sup>1)</sup> 引用は『観光紀游』（沈雲龍主編『近代中国資料叢刊』）により、漢文の訓読は筆者による。

<sup>2)</sup> 『皇漢医学』（『三閑集』）、『魯迅全集5』（学習研究社 1989）p337。

## 2. 清仏戦争勃発

清仏戦争勃発の原因は、ヴェトナムに対する保護権をめぐる中国とフランスの争いにあった。ヴェトナムの清朝との朝貢関係を完全に断ち切り、自国の独占的な保護国としようとしたフランスに対し、宗主国としてあくまでも朝貢関係にこだわった清朝との間には度々条約が結ばれ、関係の正常化が模索された。しかし結局双方の主張に妥協点は見つからず、1884年8月、フランス海軍が台湾の基隆を攻撃したのをはじめ、南洋水師を壊滅させ、福州船政局、および馬尾砲台を破壊し、戦闘状態へと陥ることとなった<sup>3)</sup>。

さて岡千仞であるが、1884(明治17)年6月6日、九日間の船旅の後に上海に到着した。上海での千仞は、王韜や後述する張煥綸をはじめとする上海の新旧の知識人たちを精力的に訪問し、また貿易都市・上海を象徴した租界、中国庶民の生活が息づく旧市街を見学するなど忙しい日々を送っていた。そんな中、横浜から一緒であった駐日公使黎庶昌の随員の楊守敬に、「蘇杭は独り山水のみに富まず、実に人文の淵叢なり」(6月11日)と、蘇州・杭州への旅に誘われた。その時、中国語を解さない千仞は通訳無しの旅に躊躇したが、同じく共に上海へ航した華僑の王仁乾が通訳兼案内役に名乗りを上げた。王の故郷は浙江の慈溪であり、帰省のついででもあった。そこで6月20日、千仞は上海を後にして蘇州・杭州への旅に出た。この蘇杭の旅では、数々の景勝地を見学したり、慈溪の名家であった王の家に招かれては盛大なもてなしを受けたり、また清末の大儒・俞樾をはじめとする江蘇や浙江の名士を訪問し、さらには朱舜水の子孫と出会うなどの機会に恵まれた。こういった旅の内容が千仞の漢学者的関心を存分に満足させたことは、中国旅行中の漢詩を収めた『觀光游草』<sup>4)</sup>からも容易に想像される。例えば蘇州の街に舟で入っていく様子として「姑蘇城外 楓橋寺、恍として斯の身の夢里を經るかと訝る」(「抵蘇州」)、また西湖に舟を浮かべた時には「平生諳熟したる西湖の勝、和靖の祠堂 蘇小墳」(「西湖」)など、ストレートにその感動を吐露する作品を見ることができるところが福建省の福州まで更に足を伸ばそうとしていた矢先、当時の上海で最大部数を誇った新聞『申報』によりフランス軍が「鷓籠」(現在の基隆)を攻撃したというニュースを知った。また上海の日本公使館からは、安全確保のために上海へ戻るようにとの通知を受ける。そこで千仞は急遽、上海へと舞い戻ることとなった(8月13日)。以後、千仞の足が福州はもちろんのこと、蘇杭に向うことは無かった。

<sup>3)</sup> 清仏戦争については主として、茂木俊夫「ヴェトナムをめぐるフランスとの戦争」、『変容する近代東アジアの国際秩序』(山川出版社 1997) pp.54-58、田中正俊「清仏戦争と日本人の中国観」、『田中正俊歴史論集』(汲古書院 2004) pp.412-423を参照する。

<sup>4)</sup> 引用は『觀光游草』(『藏名山房雜録』所収、明治20年刊行)による。

### 3. 清仏戦争と向き合う中国人—張煥綸の場合

岡千仞が中国・上海での滞在中、最も親しく付き合った中国人の一人に、張煥綸(1843-1902)という人物がいた。張煥綸の経歴、そしてその社会的位置づけについては、主として易恵莉氏の研究を基に、次のようにまとめることができる<sup>5)</sup>。張煥綸は字を経甫といい、太平天国の乱が最も激化した時期に生まれ、乱後の社会秩序が回復しつつあった時期に青年期を過ぎた。上海の龍門書院で教育を受けた張は、1878年自ら正蒙書院を設立し、後進の教育に従事した。書院とは宋代以後の公私の学校のことで、高級官僚や地方の名望家によって創建されたものである。正蒙書院は後に梅溪書院と名を改める。そして胡適が『四十自述』の中で、ここに学んだことを記している。開明的な知識人として知られた張は、国内の諸問題、そして自国を取り巻く海外情勢に強い関心を持ち、有力者たちに対して積極的に自らの意見を提示した。例えば駐英公使の曾紀澤には「曾侯に上る条陳」を、李鴻章と並ぶ洋務派官僚であった張之洞には「救時芻言」を上書し、高い評価と支持を得た。また1882年に上海道台(地方長官)に赴任した邵友廉からは絶大な信頼と賞賛を受け、その教育活動に多くの賛助を得ることとなる。かつて日本を訪問し、千仞とも親しかった王韜(1828-1897)を、王韜の研究で著名なP.コーエンは「条約港知識人」、つまり科挙による社会的成功から外れ、自らの文才でもってジャーナリズムや執筆業といった新たな職業についての上海の知識人、と称した。それに比して次世代に当たる張煥綸らは、恵まれた家庭に生まれ、伝統的教育、価値観の養成を受けることで、上海の新興知識人群を形成していた。以下、この張煥綸を通じ、千仞が清仏戦争に向き合う中国人をどのように観察したかを見ていくことにする。

上海到着後の間もない時期から、千仞と張煥綸、及び葛士濬、范本礼、姚文枬ら上海新興知識人たちの交流は始まっていた。例えばそれは、千仞が張らの書院を見学に訪れたり、張らから日本の風俗、政体、及び海外情勢についての質問を受けたり、また共に中国社会に蔓延するアヘンの弊害について筆談でもって議論するなどであった(6月9、15日)。そして蘇杭の旅を切り上げて上海に戻った時、千仞が早速訪ねたのも張であった。「二宮姓来たり。共に張経甫を訪う。庭に火槍器仗数件を陳べ、曰く『法虜無状にして、国事危急たり。一日とて戎備を懈るべからず。因りて同志諸子と約し、隊伍を編し、条規を定し、城市を巡視して、以て匪類の間に乗じて窃の発するを防ぐ』と。姚子讓、葛士源来会す。皆、忼慨して法事を論ず。余勝算の在る所を問えば、経甫曰く、『凡そ兵は百戦を経て、始めて能く精練す。今や朝議は堅く戦論を操す。法虜已に台湾

<sup>5)</sup> 易恵莉「中日知識界交流実録—岡千仞与上海書院士子的《筆話》」(<http://chinese-thought.univ-cn4e.com/modules.php?name=Sections&op=viewarticle&artid=76>)。またこれ以外に、璩鑫圭・董富勇編『中国近代教育史資料匯編・教育思想』(上海教育出版社 1997) pp.459-460を参照する。

を開覺し、兩國互いに相降らず。則ち我義憤鬱積す。劉永福の如き者、陸続輩起し、十八省を必死の地に陥れ、全勝を年月の後に要すれば、則ち必ず其の要領を得る可き也』と。余其の論の樞柄を有するを嘉し、見る所を挙げて説を為す。三子大いに悦ぶ」（8月21日）。清仏の対立を東アジア全体の危機と考えていた千仞は、蘇杭の旅の途中で出会った中国知識人たちにその意見を求めたものの、多くは関心さえ持っていなかった（8月13日）。しかし張ら上海の新興知識人たちは自衛行動に乗り出し、また実戦としては繰り返し戦うことで志気と戦力を高め、最後に勝利することを目指すなど、その毅然と立ち向かう姿勢が千仞を大いに称賛させた。また日本の軍艦「扶桑」を共に見学した時、張には艦の様々な設備に詳しい説明を求め、更に最新の大砲の名を諳んじるなど、実に熱心な様子が見られた。千仞はそういった清仏戦争という欧米列強の侵略の危機に対する張の姿勢を、「其の平生心を外事に用いるを、知るべし」、「経甫は独り心を外事に用う」と、時勢への敏感さとして評価し、科挙にのみ汲汲とする他の文人たちと区別するのであった（8月31日）。

ところが張の国際情勢に対する理解には、見逃しがたい欠点もあった。例えば張が千仞に示した「時事芻言」や「左、曾二公に上る時事を論ずるの書」などの論考を見ると、議論は適切で行き届いているものの、国外事情を論じては猜疑心が甚だしく、「中人の事を論ずるに、多く外情を得ず。独り経甫のみならず」と言わざるを得なかった（9月6日）。また「救時芻言」は、「其の外事を策するは、大旨猶お我が三十年前の儒先の海防を論ぜしがごとく、未だ其の要を得るを為さず」（9月12日）と、かつての日本の儒者同様とした。

しかしそれでも張は、旅先で出会った多くの文士が国際情勢に対して「茫たること霧中の如し」といった有様だったのに比し、中国の現状を見つめ、世界情勢を認識しようと努めるその姿勢からも、「真に得難きの士」であった（9月12日）。それはまず上述したように、清仏戦争への危機意識を持ち、毅然と立ち向かう姿勢である。また張は、千仞の清仏戦争打開策に対する最も良き理解者、支持者であった。千仞の打開策というのは、李鴻章が醇、恭二親王を奉じて欧米へ行き、この戦争におけるフランスの非を訴え、且つ同時に視察も行うという内容である。単に日中が手を組んでフランスと武力対決することは「此れ僕の廿年前に見し所」（10月17日）、つまり国際情勢を十分に把握していない開国以前の見解であって、今の千仞の主張ではなかった。「抑中土の大病は、上に在る大臣の、域外の大勢に矚く、中土が礼楽文物の大邦たるを知るも、域外の礼楽文物の大邦の、中土の如く、隣並相望むを知らざるに在り」と考える千仞は、中国の知識人、及び権力者たちが西欧各国の産業、工業の発達振りを実際に目にすることで、旧態依然たる自国の姿を自覚し、その改革に乗り出すことを期待した。欧米列強による侵略の危機と言える清仏戦争を、「禍を転じて福と為し、危を翻して安と為す」きつ

かけ”と千仞は捉えたのである。これに対し、中国社会の現状に殆ど絶望していた張は、「今先生の言を聞き、始めて国事の猶お為す有るべきを知る」（9月21日）と大いに感服した。長年温めてきた自身の大論が「今経甫一たび聞き、余の心の在る所を諒す。中土は固より心有る人の乏しからざる也」（9月21日）と、その良き理解者、支持者を得たことは、千仞に大きな満足と自信を与えた。天津道台の盛宣懷から清仏戦争に対する意見を求められた際、千仞が言説の誤りと不備を指摘し、更に自らの意見を加えた張の「時事芻言」と共に、上記の清仏戦争打開策を提示したのはこの為である（10月10日）。張、王韜らから絶大な支持を得た千仞の打開策は、後に会見した李鴻章にも理解を示された。しかし結局は採用に至らず、千仞を大いに落胆させることとなった。

清仏戦争との関連で、琉球問題に対する張と千仞の姿勢にも触れておきたい。まず琉球問題であるが、幕末以来、琉球の日中「両属」は両国の懸案であった。それを激化させたのは、1879年、日本政府が琉球の廃藩置県を断行して沖縄県を設置し、琉球の日本への強引な帰属を推し進めた“琉球処分”である。これは中国社会を激しく刺激し、多くの中国知識人の反発を招いた<sup>6)</sup>。張ら上海新興知識人らの態度も同様であったことは、姚文枬の著作である『琉球志』の巻頭に付された、日本が琉球に県を設置したことは「無名」であると激しく抗議する張の序文からも窺われる。これに対して千仞は、張らに向って英仏の百年戦争の例を引き、琉球を巡って両国が争うことで互いの兵力は高められる、そしてその段階で両国が疑念を解いて力を併せ、欧米諸国に対抗すれば何も恐れるものなど無い、「此れ以て東洋の積年の辱を雪ぐべき也」、自身は在野で政府が琉球に県を設置した意図は分からないが、「唯一東洋の威武を欧土に震わすを目すれば、則ち足る」と述べた。千仞にとって琉球は「末界の微事」であって、今はそれで両国が争う時ではなかった。何よりも両国の連帯によってアジアが欧米列強に対抗していくこと、つまり「興亜」こそ重要であると千仞は考えた。張らは千仞のこういった意見に対してその場は大笑いして済ませ、賛否の方は曖昧にした（8月21日）。ただ清仏の対立が激化するに及び、張の友人の李鍾鈺が「興亜策五篇」で述べたように、琉球の日本への帰属を認め、まずは両国が協力して欧米に立ち向かうべきだという主張も中国知識人の間からは出ていた<sup>7)</sup>。

嘗てその学徳を大いに仰いだ王韜がアヘン中毒に陥っていた事実は、王韜との再会を旅の主要目的としていた千仞に大きな衝撃を与えた<sup>8)</sup>。豊かな学識を身に付け、西洋文

<sup>6)</sup> 前掲、茂木、pp.65 - 71 参照。

<sup>7)</sup> 『観光紀游』巻七の12月14日の項で、千仞は李鍾鈺と「興亜策五篇」について言及する。また前掲、易の論文に李鍾鈺の「興亜策五篇」が張煥綸らに影響を与えたとの指摘がある。

<sup>8)</sup> 王韜の人柄、生涯については、主として王暁秋「王韜の日本旅行」、『中日文化交流史話』（日本エディタースクール出版部 2000）、唐権「海を越えた艶ごと」（新曜社 2005）を参照する。

明、文物にも明るい王韜であったが、貧しい家庭環境と科挙試験失敗により、世に用いられることはなかった。王韜のアヘンに溺れる姿は、葛士濬が言うように、「洋烟の盛行するは、或いは憤世の士の、烟を借りて一切の無聊を排するに由る。特り庸愚の小民を誤まらしむに非ず、聡明の士人も、亦た往々にして其の毒に嬰す」（6月9日）と、その反発、不満の表現であった。この王韜のアヘン中毒の現実には、王韜個人だけではなく、そういった人物を生み出した中国社会全体に対し、千仞の心に深い同情と失望を抱かせたはずである。王韜に直接「烟毒」アヘンの弊害を指摘しても、中国には更に「貪毒」賄賂の弊害があるとほらかされたり（8月25日）、また酒色で死ぬのとアヘンで死ぬに何の違いがあるのかと切り返され、千仞は「此の言戯れと雖も一理有り」（12月23日）と引き下がざるを得なかった。

しかし先行研究も指摘するように<sup>9)</sup>、王韜のアヘン中毒を知ったのとはほぼ同時に、次世代を担う新興知識人であった張煥綸らと千仞は出会った。そして清仏戦争に対する議論を通じ、張とはその交流を深めていった。先に挙げたように、張らと千仞は出会って間もない時から中国社会の弊害であるアヘン問題を語り合い、また千仞は日本社会や海外情勢についての質問を受けていた。これらは当然、従来の日中の伝統的文人交流を大きく逸脱するものであった。そして不十分とは言うものの、千仞は張の「心を外事に用いる」姿勢を高く評価していた。中国の官僚に清仏戦争への意見を求められた時、自身のものと共に手直しを加えた張の論考を提示したり、張に対しては近代中国最初の外交官の一人として知られた張德彝の欧州遊記『四述奇』の価値を熱心に説き、また翻訳書の多読を勧めたこと（12月8、21日）などは、張の「心を外事に用いる」姿勢への期待と言える。科挙の弊害、琉球問題については、両者の意見は決して一致していなかった。特に科挙については、「天下の元気を振るい起こす」為の急務として、千仞は国是の一変、文武の制度の改革と共にその廃止を張に力説したが（12月12日）、結局張はその後、科挙の受験に赴いていくのであった（12月25日）。しかし後述するように、日本からフランスと戦う中国を応援するために義捐金を持って駆けつけた若者に張を紹介するなど、千仞は張と共に「興亜」を語るに足る士人と認めていたことは確かである。伝統的な価値観と知識を備え、上海道台を千仞に引き合わせるなど有力者とも伝手を持ち、そして異域の人である千仞の意見に耳を傾ける張の「心を外事に用いる」姿勢こそ、日本では「在野の批評者」を自認していた千仞<sup>10)</sup>に、『観光紀遊』中最も多くの紙面を占める大議論となった清仏戦争打開策を打ち明けさせ、且つそれを政府の高官に進言させる等、「興亜」心を高めさせる原動力となったと言える。

<sup>9)</sup> 前掲、易論文。

<sup>10)</sup> 劉建華『魔都上海』（講談社 2000）p.171。



#### 4. 清仏戦争と日本人—中国で出会った日本人たち

次に清仏戦争をきっかけに中国へやって来た日本人、及びもともと現地におり、この戦争に深く関わっていった日本人と千仞の交流を見ていくことにする。

先にも触れたが、千仞の上海滞在中に日本から軍艦「扶桑」と「天城」が上海に来航していた。これらの軍艦は、「中法、難を構えて以後、各国は軍艦を發し、中土の各埠を巡察」させるという目的により、各国から上海へ来航した八艦の内の二艦であった（6月9日）。

「扶桑」の艦長であった松村惇蔵、そして嘗ての教え子で今は海軍少将である平野文夫と行き来した千仞は、清仏戦争関係の情報、及び日中の軍備状況をこの二人から多く聞かされた。例えば松村からは、中国軍の戦法、防備は全くなっておらず、実戦するまでも無くその勝敗が決していることを（6月25日）、また平野からは国際的な軍礼を遵守しないにもかかわらず、中国は自国に対して軍礼を行わない西洋諸国を「夷狄」と呼び、礼儀知らずと批判していることを聞く。この平野の話に対して千仞は、中国の夜郎自大な態度を批判し、「其れ今日の事を致すは、実に故有る也」と、仏との対立をはじめとする外国勢力の侵入を招く事態を当然とさえ思うのであった（6月14日）。また二人を通じ、千仞は日本の軍事力の充実ぶりも知った。それは「大艦を駛せ巨砲を粧い、欧米各国と抗礼して交を講ず。彼も亦た待するに友朋国を以てす。此れ宜しく大いに家国の為に慶すべき也」と、充実した軍備を持ち、国際的にその地位を認められ、そして礼を尽くされる“日本”そのものへの評価と受け取られた。この軍備の充実と「我が邦各科を設けて欧学を講じ、後進輩出され器と成る」、つまり学校教育の導入は、千仞にとって誇るべき明治維新の成果であった（6月16日）。

清仏戦争勃発に際し、陸軍工兵中尉の小沢豁郎を中心に、福州で数名の「支那通」が集まって「福州組」を組織した。そして彼らは西欧諸国の侵略に甘んじる現状の打破を促そうと、清仏戦争における混乱と動揺に乗じて中国社会に革命を起こす計画を立てた。所謂「福州事件」がこれである。「のちの支那通の行動様式を暗示するような」<sup>11)</sup> この事件は、組織内で革命は中国人主導で行われるべきだという意見と、中国人にそれが不可能であるから日本人が率先すべきだという意見の対立、且つ本国の軍中央部に知られた事により、最終的には未然に阻止されることになる。ところでこの事件に深く関わった人物の何人かに、千仞は旅の途中で接触していた。海軍少尉の曾根俊虎、芝罘の領事であった東次郎、東を慕って中国に来た白井新太郎、東洋学館関係者の山本仲齡らである。しかし千仞がこれらの人物から直接「福州事件」の計画を聞いた形跡はなく、また

<sup>11)</sup> 戸部良一『日本陸軍と中国』（講談社 1999）p.25。

千仞にこの事件への言及はない。福州の戦場跡を視察に行った曾根に千仞がその様子を聞きに訪れる（9月18日）など、これらの人物との付き合いは専ら中国の風俗、文化をはじめ、清仏戦争に関する情報を提供されるに止まる。共に中国社会、ひいてはアジアの再生、欧米列強による侵略に協力して抵抗するという「興亜」を唱えた千仞と「支那通」たちであったが、そのアプローチはかなり異なっていたと言える。千仞が清仏戦争の打開策、及びアジアの連携の必要性に熱弁を振った相手は殆ど中国人であり、日本人同志の間では後述する岸田吟香などを例外として、意外に少ない。また「支那通」の中にも差異はあるが、千仞の「興亜」の弁には、琉球問題を過小視したのを除き、日本の国益優先は殆ど見られない。アヘン、科挙の弊害の排除とともに、清仏戦争終結の為に二親王を奉じた使節を欧米に派遣するなど、千仞の主張は専ら中国社会再生の為に中国人主導の建策であった。多くの中国知識人からの支持はこういった点による。また千仞はそもそも漢学者であり、文人交流も重視した。「独特のロマンティシズムと、やや独り善がりの『東亜保全論』<sup>12)</sup>を有すことを特徴とする、多くの「支那通」に共通した性質は、千仞の本質でなかったのである。

上海滞在中の千仞のもとを、清仏戦争の勃発の報を聞いて日本からやって来た若者が訪問することがあった。その一人に尾崎行雄（1858-1954）がいた。当時、郵便報知新聞の特派員として、清仏戦争の取材で上海へ来ていた尾崎は、友人で時事新報の特派員であった本多孫四郎と共に、千仞のもとを訪ねる。そして二人は、福州でのフランス軍の攻撃以来、日本国内では各港に軍艦を配置し、中立国として厳戒態勢をとっているが、上海は意外にも平靜だと伝えた。それに対して千仞は、安禄山の乱の時に大宰府が厳戒態勢をしいた例を挙げ、そのくらいの備えはむしろ必要だと意見した（9月5日）。尾崎は三ヶ月ほど中国に滞在して取材を続けたが、戦況に進展が無いことを理由に帰国する。後にこの時の滞在記録をまとめ、『遊清記』を出版した。『遊清記』の特徴は、尾崎が新聞記者として清仏戦争の情報を収集、且つ分析し、それを基に当時の中国を手厳しく批判した点である。それは清国兵の「怯弱」「残忍」さをはじめ、清国政府の統治力の無さ、また敗戦を勝利と偽る報道に対しては「総て支那人の事を記するや、耳目の見聞する所に抛らずして、想像の馳聘する所に抛る、故に其記事の皇張誇大なる遠く本邦人の意想外にいで、動もすれば一二尺に足らざる白髪を、皇張して三千丈と云ふに至る…」（『遊清記』10月5日）<sup>13)</sup>と、中国古典に多々見られる虚構、誇張表現を指摘しながらの非難であった。『遊清記』には『觀光紀游』に見られるような中国文化への感動、及び中国社会への同情や後述する“可能性”など、皆無であったと言える。

<sup>12)</sup> 前掲、戸部、p.26 参照。

<sup>13)</sup> 尾崎行雄『遊清記』、『幕末明治中国見聞録集成』（ゆまに書房 1997）p.38。

またある時、杉田定一、秋山鑑三の二人が千仞のもとを訪れた。「秋山は藤田一郎の義子たり。(秋山)曰く『家翁は中法の開闢を憂え、兎に命じて北京に赴かしめ、醇親王に見え、金を贈りて微志を表わしむ』と。余曰く『善なり。此れも亦た忠類なり。子輩は此処に来、又た曾て中土の士人に見えるか』と。曰く『未だ』と。乃ち濯をして二姓を伴い、正蒙書院を詣いて張経甫に見えしむ」(9月17日)。日中の協力によって列強と渡り合うことを主張した千仞は、フランスと戦う中国を応援する藤田一郎と、その代理としてやって来た秋山らを歓迎したのであった。実はこの藤田一郎は、清仏戦争の戦況を報道することを目的に、イギリス人によって刊行された絵入り新聞『点石齋画報』にも登場した人物である。そこでは清仏戦争勃発を知り、藤田一郎自ら義捐金を持って東京の清国公使館を訪れたことが報じられ、その義侠心溢れる姿が称賛された<sup>14)</sup>。藤田一郎がこの時届けた義捐金は受け取りを拒否されたが、『観光紀游』の10月18日の項には、秋山が首尾よく義父の任務を果たし、千仞らがそれを祝賀したことが記されている。

上海で楽善堂を経営した岸田吟香(1833-1905)は、千仞と中国の諸問題を最もよく議論した日本人である。岸田は頻繁に中国に渡って商業活動を展開したのみならず、日中の知識人の交流の仲介を果たした人物としても知られる<sup>15)</sup>。多少諧謔的な描写となっているが、千仞が友人の中国人にあてた手紙の中に、そういった吟香の活動が生んだ交友関係の一例が見られる。「…而して余は大古馬頭の第一樓に館し、日に王紫詮、張経甫、岸吟香の諸人と与に会飲し、酔えば則ち欧米の軍艦の、峩然たること城の如き者を睨み、五洲の大勢を議論し、抜劍起舞し、自ずから狂たることを忘る」(『観光紀游』卷四・序)。日中の知識人たちが両国の提携により、欧米列強へ対抗しようという認識を共有した一場面と言える。

## 5. 岡千仞にとっての清仏戦争

千仞が中国を旅することについて、『申報』は「日東の文豪某、著書千巻を携え、中土の山水の游を為す」という記事を掲載したという(6月16日)。千仞は当初、文士として中国側からその訪問を歓迎されていたことがわかる。しかし中国に到着して直ぐに、友人の王韜のアヘン中毒、上海での租界と旧市街の著しい差異、そして何よりも蘇杭の旅を中断させた清仏戦争との遭遇が、千仞を文士であるのみならず、日中が協力してアジアを立ち上げさせ、列強の侵入に対抗しようとする「興亜」の士へと駆り立てた。

<sup>14)</sup> 藤田一郎を取り挙げた「点石齋画報」を紹介した先行研究としては、石曉軍『「点石齋画報」にみる明治日本』(東方書店 2004) pp.20-21、武田雅哉『<鬼子>たちの肖像』(中公新書)(中央公論新社 2005) pp.49-55がある。

<sup>15)</sup> 前掲、劉、pp.166-169。

それでは千仞が「興亜」への思いを奮い立たせるに当たり、清仏戦争が具体的にはどのように影響したのかを最後にまとめてみたい。まず清仏戦争は千仞に、“立ち遅れ”た中国を見せ付けた。それは不十分な軍備や兵士の志気の低さなどの軍事面、科挙のような旧式の学問システムの存在、そしてその影響下にある官僚や知識人たちの国際理解の乏しさを指す。これらは清仏の対立の最中、上海に集まった日本人の軍事関係者、及びそれ以外の民間人からの情報と幾人かの中国人との議論を通じ、また日本の軍事力の充実振りや中立国としての万全の警戒態勢との比較により、千仞の目には一際鮮明に映った。フランスとの対立をはじめとする外国勢力の侵入を招き、社会が不安と困難に陥る原因として、千仞がこの“立ち遅れ”を指摘し、そして繰り返し批判したことは、先に見てきたとおりである。

“立ち遅れ”た中国をクローズアップし、そして厳しく批判させた一方、清仏戦争は千仞に中国社会における微かな“期待”、“可能性”をも発見させた。それは上海の新興知識人、つまり張煥綸との出会いによる。上述したように、多くの中国知識人が国際情勢に全く通じていないことは、科挙の弊害の一例として千仞の批判の対象であった。また千仞は中国旅行をする途上、何如璋、張斯桂、黃遵憲ら駐日清国公使館のメンバーなど、嘗て日本で親しくした中国人の友人に幾度となく連絡をとったものの、全く返答を得ることが出来なかった。こういった旧友たちの不誠実さを何度も体験した千仞は、「中土の人は概ね皆浮夸、信義無し」と、怒りと失望を抱いた（11月10日）。一方、今回の旅で新たに知り合った張煥綸は、充分とは言えないものの、国内外の問題と真摯に向き合い、また千仞との交流には誠実さと礼を尽くす人物であった。そして何よりも張は、清仏戦争に対して決然と立ち向かおうとする行動力を持ち、且つこれをきっかけに中国人自身がその社会変革を試みるべきだとする千仞の意見への賛同者であった。清仏戦争を契機に深められた張との交流は、アヘンの禁止と科挙の廃止、日中の提携によるアジアの再生といった千仞が目指す「興亜」の、その実現の可能性が中国社会に皆無でないことを知らしめ、そして議論を通じてその活動に千仞を導いたと言える。

『観光紀游』が単なる中国社会への批判の書ではなく、現状を見つめて改革することを促す、つまり「薬石の語」（『観光紀游』「例言」）となることを望んだ千仞の意図は、清仏戦争を通じて高められた「興亜」への思いをも汲んでいたのである。

### 主要参考文献

- 璩鑫圭・童富勇編『中国近代教育史資料匯編・教育思想』（上海教育出版社、1997）  
茂木俊夫『変容する近代東アジアの国際秩序』（山川出版社、1997）  
戸部良一『日本陸軍と中国』（講談社、1999）

王曉秋『中日文化交流史話』（日本エディタースクール出版部、2000）

劉建華『魔都上海』（講談社、2000）

唐権『海を越えた艶ごと』（新曜社、2005）

易恵莉「中日知識界交流実録—岡千仞与上海書院士子の《筆話》」、(<http://chinese-thought.unix-vip.cn4e.com/modules.php?name=Sections&op=viewarticle&artid=76>)